

徳川將軍家に縁故ある神社をめぐる寺社奉行と神主

— 岡崎にある伊賀八幡宮の社殿維持をめぐる —

湯浅 隆

論文要旨

17世紀初頭、我が国に数多くあった寺や神社のうち、徳川將軍家と特定の縁故をもっていた一握りの寺社は、社殿の創建や改築を次々と命じられ、境内の威容を整えていった。この一連の普請は、徳川將軍家が武家の棟梁として、他の諸勢力に対し超越した存在であることを誇示しようとする観点から行つたものであった。研究史では、初代將軍家康の靈廟である久能山や日光の東照宮をこの典型的な事例として、従来から取りあつかってきた。この両地の東照宮が、近世をとおし徳川家の聖域として幕府により周到な庇護が加えられていたことは、周知のとおりである。

江戸時代にあつて徳川宗家との親密な関係を由緒として誇つた寺社は、將軍家の菩提寺や靈廟、同家の出身地である三河国東部から遠江国にかけて分布する寺社の一部、および始祖が三河定住以前に住んだ地とされた上野国新田庄の寺社の一部などであつた。これら將軍家との由緒を誇つた寺社群にたいして、幕府による庇護の

様態は由緒の内容により異なつていた。ことに18世紀以降になると、幕府の財政が逼迫の度を増していったなかで、將軍家とのあいだにおける由緒の軽重の差は、將軍家を与える庇護・援助の度合・内容に大きな影響を与えていたのである。

本稿では、將軍家の先祖である三河時代の松平氏以来、松平・徳川家の氏神であつた岡崎の伊賀八幡宮を取りあげ、この神社に幕府が施した助成の実情をみていった。ことに、修築後百年を経て18世紀半ばに顕在化した社殿の損傷・劣化にたいして、神主が幕府に依頼した修復助成と、それにうけた寺社奉行の緊縮財政下における対応とを具体的に検討した。そして、両者は、庶人にたいしては公儀の權威を具現する装置として存在する社殿をめぐる、ともに支配階級を構成する立場に立ちながら、対応策では相反する論陣を張る過程を明らかにした。